

中学受験

受験対策セミナー

— 2023 年度入試概要と伸び悩み対処法 —

日付：2023 年 3 月 12 日

2023年度受験結果と 効果的な学習リズムの作り方

2023.03月

担当講師 MEP 鶴川 勝

(1) 2023年度の中学入試

①今期の状況

関西の中学入試は過去5年間ほぼ同じ状況が続いている。首都圏の中学受験は拡大が続いている。

コロナ禍で小4～小5で影響を受けたのが今年度の受験生である。小5～小6で影響を受けた昨年度の受験生に比べて学力への影響は小さい。

関西の私立中学の入試解禁日は1月14日土曜で、ほとんどの校が解禁1日目の午前に入試を実施した。1日目の午前の受験者総数は18000、これは2019年から5年間ほとんど変化していない。

1日目午前入試の受験者総数が実際の受験者総数に近い数だと考えられるので、次の式で受験率を出している。

受験率 = 1日目午前の受験数 ÷ 小6児童の総数

関西の中学受験 受験率と受験者数

年度	2019	2023
受験者総数	18000	18000
小6児童数	179000	173000
受験率	10.1%	10.4%

※少子化でも受験率は微増。

少子化で、関西の小6児童数はこの5年間でおよそ5000減った。都心部で児童数が増加しているエリアもあり、受験率が高い都市部では少子化の影響は小さい。受験率や受験者数の変動は府県単位でなくエリア別にみるべきだろう。

難関中学を受験する場合、志望校と併願校をあわせて少なくとも3～4校を受験する。だから受験回数は受験者総数の数倍になる。出願をしておいて受験は辞退する場合があるので出願総数はさらに多く、一人当たり5～8回程度になる。

②首都圏との違い

首都圏の中学受験は、受験者数は9年連続で増加し、受験率は今年度は1.5%も増えて22%となった。いずれも過去最高を記録した。

中学受験の規模が拡大している首都圏や中京地区では私立中学の新設・増設で定員増が見られる。一方、関西では学校の移転やコース編成の変更などは見られるが新規開校は稀である。むしろ入学者が募集定員に満たない学校や、新規募集を停止する学校が目立っている。

関西の中学受験が伸びない理由はいろいろあるが、主な理由として景気の格差というものも有るが、それだけではなく、高校大学を含めた受験環境の違い、教育文化の違いによるものが大きい。

関西の各府県には公立のブランド高校が多く存在し、京大・阪大ほかの難関国立大学への高い進学率を誇っている。

親兄弟や親戚、先輩には公立高校から難関大に進学した人を多く見つけることができる中、公立中学から公立トップ高校を経て京大に進学する進路が理想とされていることは今も変わっていない。公立高校人気の高さが首都圏とは異なっていることが最も大きな違いだろう。

関西人の一般的なコスト意識では、「同じ難関大学に進学するならば、公立進学に比べると私学進学はとても費用がかかる。よって私立進学はコスパが良くないと思っているのだ。

首都圏と比べて高収入世帯が多くないのも現実である。関西も高収入家庭のコスパ意識は私学有利に移りかわっているが、一般の世帯の意識はあまり変わっていない。今後、景気が上向けば関西における私立進学のコスパ評価も変わるだろう。

※余談だが、統計では世帯年収1千万以上は全体の10%であり、関西の応募率と妙に一致している。

③受験動機の広がり

関西で中学受験といえば、難関大学進学を見据えた志望がほとんどだが、首都圏の場合は受験生の志向も幅広く広がっている。そのことが受験規模

を拡大させている。

志向の広がりと呼応して、難関大進学を目指す通常の「3~4科目入試」のほかに「1科目入試」「英語重視型」「適性検査型」のような新しい受験型が見られる。

私立中学に進学する動機

- ・中高6年一貫指導が難関大学受験に有利
- ・地元の公立中の教育環境に不安がある
- ・学校設備や部活設備が充実（IT活用他）
- ・希望する専門コースがある
- ・難関私大と連携（系列校や提携コース）
- ・先進教育に魅力（STEAM教育「科学、技術、工学、芸術、数学」）
- ・グローバル教育（中高での留学、英語授業、国外大学進学支援など）
- ・まだ少数派だが、国内でインターナショナルスクールへ進学したり、海外の大学進学を目指す家庭は増えている。

④来年度の見通し

少子化、物価高による家計負担の増加などのマイナス要因を挙げて、中学受験者数は今年がピークとみる評論家もいる。私は各家庭の志向が多様化し、受験する層が広がっていることを踏まえて、私立中学進学を志望する家庭は少しずつ増えると考えている。ただし少子化も進むので、当面は関西は横這いがつづき、首都圏では受験者が増加すると考える。

※（余談）首都圏は小学校受験が盛んだが、最近も増加傾向にある。厳しさを増す中学受験で親の負担が高まったことが一因というのだ。公立小進学では家庭教育の負担が大きいため私立小進学に変更する高収入家庭が増えているという。私立小学校に預けることで親と本人の負担を軽減するのが狙いだというのだ。いわば入塾時期の前倒しである。

（2）私立中学の入試方式

関西（2府4県）の私学連盟は統一入試解禁日を設けており、全私学がこれを遵守している。

- ・関西以外の別会場では解禁前の実施は可能。
- ・国公立の入試日は各府県で別途定める。
- ・関西私学連盟外の学校は解禁日に縛られない

2023年度の入試解禁日

関西全域	1月14日（土）
埼玉	1月10日（火）
千葉	1月20日（金）
東京・神奈川	2月1日（水）
東海地区	各校で異なる

①受験日程

関西のほとんどの私立中学は解禁1日目の午前に入試を実施している。そして解禁4日目には、ほとんどの校が入試を終えている。

※合否発表や入学手続き、国公立の受験が残る。

※5日目以降実施の例→洛星は1日目と7日目。

受験機会が1回だけの学校は少ない。2回設ける学校が一般的。3回以上の学校も少なくない。

1回目と2回目を各学校では「前期・後期」や「A・B日程」のように名付けている。

複数回設けている場合は、同じ学校に何回も出願できて、何回も受験できる。複数回受験する生徒への特典として加点を与える学校もある。

「午後入試」を実施する学校も多いので、4日間の午前と午後をあわせると最多8回の受験が可能である。

※受験機会1回で2日間入試を課す学校は3校

1日目+2日目 灘・甲陽

1日目+3日目 神戸女学院

②受験型

- ・前期試験は3~4科目型の入試が多い。
- ・後期入試や午後入試は2科目型が多い。
- ・関西では4科目型は少数。
- ・「アラカルト方式」として4科目でも3科目でも受験できる学校が多い。

※4科目型アラカルト方式の男子校の大阪星光は理科に比べて得点しやすい社会選択が有利と言われてきたが、ここ5年間に社会の難化が進んだことで、社会選択が有利とは言えなくなった。

・英語重視型入試として、英語入試を選択できたり、英検取得級を得点化して加算する学校もある。

※国公立の入試は私立入試の受験型とは異なる方式が多い。各方式に対応する対策が必要となる。

③前期よりも後期日程の方が難度が上がる

同じ学校、同じコースであっても、前期入試より後期入試の方がかなり難度が高い。理由は、前期に比べて、後期は募集人数を絞っているために競争率が上昇し、受験者平均に対して合格者最低点が大幅にアップするからである。

同じ学校を受験する場合は、前期で受験するほうが合格可能性は高い。

④前受け入試、腕試し受験

関西以外の私立中学は、関西の解禁日より前に関西の会場で入試を実施できる。多数の私立中学が12月から1月上旬にかけて都心会場を設けて入試を実施している。塾では「前受け入試」と呼び、本番入試前の「場慣れ」や「合格体験」を目的に塾生を選抜して参加させている。北海道の函館ラサール・愛媛の愛光・他、寮完備の学校が多い。

※関西の私立中学も、西大和などのように、首都圏や名古屋の会場で「前受け入試」を実施している学校もある。

※首都圏や東海地区の大手進学塾では、入試日程が早い関西のブランド校を受験するツアーを組み、「受験生の腕試し」と「塾の進学実績アップ」を目的として関西遠征させている。

(5) 難関校の強気受験と併願校の出願増

コロナ禍の影響で全体の学力が低下した昨年度は「1日目の受験校を手堅く合格しておこう」と安全志向が強かったが、コロナ禍の影響から抜けた今年度は、強気の難関校受験が増えた。

一方で第2志望校や滑り止め校の合格を確実にするために併願校の受験回数を増やしたようで、一人当たりの出願数が増え、同じ学校を複数回出願するケースが増えている。

過去データをもとに合否判定をするので、今年度の受験生は合格可能性が高めに出る傾向がある。

また、志望校の入試過去問題を使って得点力を測ると、昨年度の問題では合格点に届くケースが多かったのではないかと考える。

強気受験だからこそ、併願校受験では石橋をたいたいて渡るものである。出願数を増やし、なるべくなら入試前半の午後入試を組み込み、さらに複数回受験の特典を生かしたということだろう。

(6) 女子受験生の共学志向ますます強まる

①急伸校はすべて共学

須磨、夙川、高槻、雲雀ヶ丘、
※2024 滝川が共学化。

②難関女子の伝統校が易化

神戸女学院（固い支持層は健在だが・・・）
四天王寺（医志コースも例外でない）

③共学最難関校（女子）の受験者数は横這い

西大和（女子）、洛南（女子）
※少数募集のため難度が頂点。挑戦者が敬遠。

④中堅女子校は定員割れ状態

もともと公立上位高校の併願先であったようないわゆる伝統校が大崩れ。募集人数確保が難しい。

⑤私大系列の女子校は堅調。

同志社女子、甲南女子
系列大学に進学できるコースに加え、国公立大学進学コースを併設した点が共通の特徴。難化の勢いは弱まっている。

⑥私大系列校の人気は第2段階へ

関関同立の系列校の人気上昇は高止まり。
産近甲龍の系列校は特進コース併設で維持。

(7) 難化が止まらない夙川

女子校の夙川学院が須磨学園グループの共学校となり都心に移転し夙川中学に改名。須磨学園の併願校となってから毎年飛び級的に難化している。海星女子をしのぐ共学の難関校となっている。

以上